

曲目解説

イリアッド

Iliad from Symphony No.2 "Odyssey"

ロバート・スミス

Robert W. Smith

R.W.スミス(b.1958；アメリカ)は、比較的簡単な技法で書かれながらも「格好良い」作品を数多く手掛けており、現在、吹奏楽界で最も人気のある作曲家の1人である。この作品は現在作曲中の第2交響曲「オデュッセイア」の第1楽章にあたり、2000年にBelwin社より出版された。

この交響曲は、10年におよんだトロイ戦争を終え、祖国に帰国するオデュッセウスの苦難の旅を描いた大叙事詩「オデュッセイア」を題材としているが、この第1楽章は、その前の様子を描いた叙事詩「イーリアス」から、有名な「トロイの木馬」の物語を曲にしたものである。冒頭のホルン、フルートソロに始まり、パワフルに展開される。擬音も多く使用されており、情景を思い浮かべながら聴いてみると面白いだろう。なお第2交響曲は全4楽章から成り、第2楽章「ポセイドンの風」は昨年出版されたが、残りの楽章は未発表のため、その全貌は明らかではない。

世の終わりへの行進

Procession to the End of Time

ヴァーツラフ・ネリベル

Vaclav Nelhybel

V.ネリベル(1919-1996；チェコ)は、1957年にアメリカに移住して、数多くの優れた吹奏楽作品を手掛けた。1996年に76歳で世を去ったが、この作品は晩年に書かれた、まさに遺作とも言えるものである。彼の生前には出版されず、1999年にSouthern Music社より出版された。

この曲の構想はチェコ在住の頃に考えられたもので、タイトルについては、第2次世界大戦中、ナチスドイツの侵攻に苦しんだチェコ人の絶望感が込められている。チェコ出身のネリベルにとっては特別な意味を持つようだ。この作品を手掛けたことによって、呼び覚まされた過去の記憶に強い抵抗感を示したという話も伝えられている。ネリベル独特のサウンドが印象的だ。

シャコンヌ

Chaconne

ヨハン・セバスチャン・バッハ

Johann Sebastian Bach Arr. Larry Daehn

J.S.バッハ(1685-1750；ドイツ)の「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番」より、傑作として知られる「シャコンヌ」を吹奏楽で演奏する。この作品は、19世紀以降、ピアノ独奏曲、管弦楽曲、ギター独奏曲などに編曲され幅広く演奏されているが、今回演奏に使用する譜面はF.ブゾーニ(1866-1924；イタリア)が1893年にピアノ独奏用に編曲したものにに基づいている。Daehn社より出版。バロックの響きを吹奏楽で表現するという、少し変わった試みに興味津々だ。

第3組曲「バレエの情景」

Third Suite for Band "Scènes de Ballet"

アルフレッド・リード

Alfred Reed

A.リード(b.1921；アメリカ)は、吹奏楽界で最も有名な作曲家の1人で、すでに80才に近い高齢ながら、今なお精力的に活躍している。この作品はサブタイトルにあるように、バレエの情景を描いた全4楽章から成る音楽で、1981年に作曲、後にE.B.Marks社より出版された。

第1楽章「ファンファーレと序章」は、金管楽器の、いかにもバレエ風のファンファーレで幕開けとなる。第2楽章「パ・ドゥ・ドゥ」は、フルートのカデンツァで開始され、すぐ木管が奏でる3拍子の主部に移る。微妙なテンポ変化や、途中で現れるワルツなど、大変優雅な曲で、男女2人の踊りの音楽である。第3楽章「風変わりなポルカ」は、伝統的な2/4拍子のポルカに5/8拍子の変拍子が時折現れる風変わりな曲だが、リズムカルで小気味良い。第4楽章「全員の踊り」は、まさにタイトルの通りで、終曲にふさわしく大変盛り上がる。この組曲は名曲である。

トリステザ

Tristeza

アロルド・ロボ & ニルティーニョ

Haroldo Lobo & Niltinho Arr. Toshio Mashima

バーデン・パウエル(b.1939)のギター演奏で有名なサンバの名曲。タイトルのトリステザ(Tristeza)とはスペイン語で「悲しみ」という意味である。曲中で「悲しみよ、お願いだから去ってくれ。もう悲しみはたくさんだ。私は、あの喜びの生活に戻りたい。ふたたびサンバを踊りたい」と歌われている。元々はカーニバル曲集の1曲としてニルティーニョの作詞・作曲で発表されたが、1965年にアロルド・ロボが補作、翌1966年に大ヒットとなった。今回演奏する吹奏楽版は、作曲・編曲で活躍中の真島敏夫によるもので、歌詞はないが、途中で歌が加わる。

キルケニー・ラプソディー

Kilkenny Rhapsody

ケース・フラク

Kees Vlak

K.フラク(b.1938; オランダ)は、ヨーロッパの出版社から数多くの作品を出しており、最近日本でも注目されている作曲家である。タイトルの「キルケニー」は、アイルランド南部にある地名で、この地方に伝わる民謡や舞曲をメドレー風に構成した狂詩曲である。Rundel社の出版。軽快なアイルランド民謡「Green Island」を、遠くから近づいてくるように使用した序奏から始まり、叙情的な「The Gentle Maiden」(やさしい少女)、軽快な「Single Jig」(イギリス民謡)、たっぴりと詩情豊かに歌われる「The Foggy Dew」(霧のつゆ)へと続く。次に打楽器に導かれて、軽快な「Hornpipe」(ホーンパイプ)、さらに急速で力強い「Irish Jig」と続き、「Irish Air」(アイルランドの歌)による、広々とした感動的なエンディングで曲を閉じる。現地に古くから伝わる旋律を生かして、無理に技巧をこらしていないのが、かえって素朴な美しさを際立たせている。

第2組曲

Second Suite

ロバート・ジェイガー

Robert Jager

R.ジェイガー(b.1939; アメリカ)は、高校時代から吹奏楽の作曲・編曲を行っていたという。優れた吹奏楽作品に授与される「オストワルド賞」を、過去3度も受賞しており、かなりの実績を持った作曲家で、60才を過ぎた現在においても精力的に活動を行っている。この「第2組曲」はジェイガーがまだ20代前半の1964年頃に作曲されたもので、第1楽章「ファンファーレ」、第2楽章「バラード」、第3楽章「スケルツォ」の全3楽章から成る。音の流れに無理を感じさせない優れた作品で、第2楽章のソロは大変美しい。第3楽章の打楽器群や管楽器群のリズミカルな部分は小気味よく、聴いていて楽しい。最後は力強く曲を閉じる。Volkwein Bros社の出版。

セレブレーション

Celebration

フィリップ・スパーク

Philip Sparke

P.スパーク(b.1951; イギリス)は、吹奏楽界で根強い人気のある作曲家。この作品は日本の「東京佼成ウインドオーケストラ」が、1989年7月に初めて行ったヨーロッパ演奏旅行を契機に、ヨーロッパの3人の作曲家に、それぞれ委嘱された作品の1つである。1991年に完成、Studio Music社より、1993年に出版された。スパークによれば、この作品は2つのことをセレブレート(称賛)しているという。1つは「東京佼成ウインドオーケストラ」の驚くべき演奏能力、もうひとつはもっと一般的なもの、つまり人間のスピリット(魂、精神)における楽天主義的な面を称賛しているという。作品は、冒頭の金管楽器、打楽器を中心としたファンファーレで始まり、これが木管楽器等に受け渡されながら展開される。後半は一転してプレストの軽快な曲となり、次第にテンポを早めながら、クライマックスに向かってなだれ込むように加速し、フィナーレを迎える。後半は、一瞬たりとも気を緩めることが出来ないような、スリリングな展開である。

アルプスの詩

Poema Alpestre

フランコ・チェザリーニ

Franco Cesarini

F.チェザリーニ(b.1961; スイス)は、大変優れた吹奏楽曲を手掛けている。この演奏会でも、第7回('97)に「メキシカン・ピクチュアズ」、第9回('99)に「闇をさまようもの」という2つの作品をメイン曲として演奏しており、馴染みの作曲家である。今回演奏する作品は、1999年にMitropa Music社から出版されたチェザリーニの最新作で、ヨーロッパ・アルプスを舞台とした壮大なスケールの交響詩。全7部構成の大作で、途切れることなく一気に演奏される。各部のタイトルはイタリア語表記のため、詳しいニュアンスは不明な点もあるが、簡単に解説したい。第1部「Nebbia」霧に包まれたアルプスの情景から始まる。第2部「Della Malinconia」は哀感に満ちた旋律が印象的。第3部「Luce Improvvisa」は、雲間から光が射し込む情景だろう。大変力強い音楽で展開される。第4部「Operationes Spirituales」は、一転して物静かな音楽となる。オーボエ、フルート、イングリッシュホルンの旋律が大変美しい。第5部「Alpeggio」では、夜明けを思わせるホルンやカウベルの響きが現れる。第6部「Tormenta」は嵐だろうか。サンダーマシン(擬音楽器)は吹き荒れる風を表現し、大変荒々しく展開させる。そして冒頭の霧の情景の再現部を経て、第7部「Dello Stato Divino」は、雄大なアルプスを思わせる大変美しく情熱的な音楽で、感動的なフィナーレを迎える。まさに、後世に残したい名曲である！

